

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02211

研究課題名（和文）戦争・統治・政治：ポスト68年5月のフーコー思想とフランス社会哲学

研究課題名（英文）War, Government, Politics: Philosophy of Michel Foucault and Critical Thought in France after May 68

研究代表者

箱田 徹 (Hakoda, Tetz)

天理大学・人間学部・准教授

研究者番号：40570156

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：1970年代前半のミシェル・フーコーの著作を「戦争」概念に注目して分析することで、後に展開される権力論と統治性論が、フランス「68年5月」後の政治・理論状況と密接な関係にあることを改めて明らかにするとともに、フーコーの権力や統治についての後年の議論を、近代社会の政治的統治の類型論であることを超え、社会を変革する主体の生成という角度から読み直す手がかりが、この時期のフーコーの理論的歩みのなかにあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フーコーの統治性論と権力論を、ポスト68年5月という歴史的背景を踏まえて検討すると、1970年代前半の政治的ラディカリズムとの対話が重要であること、またその文脈に議論を戻すことで、フーコーの思想が、現代の政治的・社会的統治のあり方のみならず、社会運動とそこでの主体の生成という問題を考えるうえで重要であることを、思想史のアプローチから示した点に学術的意義がある。こうした観点は、21世紀の現代社会で続発する抗議運動や社会変革の動きを考察するうえで豊かな示唆をもつ点に、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The research project analyzed the writings of Michel Foucault in the early 1970s, focusing on the concept of "war" to show that the theory of power and governmentality, which were to be developed later, has a strong theoretical relationship with the political and theoretical situation in France after May '68. Besides, the study also suggests that Foucault's thought in this period is a potential rich resource where we could read his conceptions of governmentality and power in a different light, that is not only as a typology of political governance in modern society but as a historical, theoretical consideration of the creation of subjects that would transform the society.

研究分野：思想史

キーワード：思想史 社会哲学 フランス 68年5月 フーコー

1. 研究開始当初の背景

(1) ミシェル・フーコーの一次資料をめぐる状況には2010年代に大きな変化が生じ、彼の30年間の研究活動全体についての資料が利用できる環境が整いつつある。2014年には大量の草稿・書簡をフランス国立図書館が一括購入し、整理が進められる一方、2015年春にコレージュ・ド・フランス講義録(1970年~1984年)が完結し、11月上旬には主要著作がプレイヤード叢書から全2巻で刊行された。また1994年刊の *Dits et écrits* (邦訳『ミシェル・フーコー思考集成』) 未収録のテキストの校訂版を出版する作業も続いている。未刊行の『肉の告白：性の歴史 第4巻』にも出版の動きがある(2018年に刊行された)。

(2) 申請者の課題にかかわる近年のフーコー研究は、生政治・統治性概念を用いた応用研究や現代社会論、第二次大戦後の新自由主義思想とフーコーの思想との距離感を測るもの、フーコーのテキストについての注釈的研究の3つに大別できる。このうち1番目と2番目については申請者がすでに批判的に検討したところであり、フーコーの思想を開く試みは一定評価できても、解釈の厳密性に難点を抱えるなど、フーコー研究自体を革新するような論点は出てきにくいと思われた。3番目については堅実な研究も見られる一方で、議論がフーコー研究プロパーの狭い枠内に収れんし、フーコー思想が隣接領域に及ぼしてきた大きなインパクトが失われる危険もある。したがって今後のフーコー研究には、フーコー「的」研究の大胆さとフーコー「学」の厳密さを摂取したうえで、どのような思想史的問いがテキストに読み取れるのかを明らかにしつつ、その問いを現代の課題とつなげることが求められている。

2. 研究の目的

(1) 本研究の大きな目的は、1960年代末から1980年代初頭のフーコーの思想を戦争、統治、政治という概念から通時的かつ共時的に捉え直すことで、68年5月の前後10年あまりの左翼主義の時代の社会と理論がフーコーの思想形成に果たした役割を明らかにすることだった。本研究のキーワードに「戦争」を含めた理由は2つある。1つは、フーコーが近代はもちろんのこと古代や中世、初期近代にあっても、真理の現れには何らかの「争い」がかかわっていると考えていることが、ブラジルでの連続講義「真理と裁判形態」(1973年)などで明らかになっていること、もう1つは、戦争から権力、統治というフーコー思想の概念上の移動が「社会理論」としての成熟ではなく、統治論における政治的主体化のプロセスの考察という課題の練り上げを意味していることだ。こうした見地が1960年代から70年代の議会外左翼のラディカルな潮流(左翼主義 *gauchisme* と呼ばれ、とくに毛沢東主義を掲げた人びと)との理論的対話の見通しをつけ、フーコー思想の独自性を浮き彫りにするというのが本研究の作業仮説だった。

(2) フーコーの1970年代前半の議論を「戦争」を軸に読み解くことで、1970年代後半から80年代にかけての統治論との通時的な接続を試みるだけでなく、同時代の左翼主義者たちの政治的かつ理論的な試みとの比較という共時的な対話の機会を設けることもまた、本研究の目的であった。フーコー研究の現状が応用と注解という隘路に陥りかけている現状を踏まえれば、このような通時的かつ共時的な理論的作業を行い、一次資料を用いて1970年代前半のフーコー思想の特徴を捉え返すことで、「ポスト68年5月」の時代の社会哲学の歴史的限界と理論的可能性を明らかにすることも本研究申請時の狙いである。

3. 研究の方法

(1) 日本語、フランス語、英語を用いた文献研究を行った。一次文献としてミシェル・フーコーの刊行済み文献を利用した。また二次文献としては思想史、社会哲学、歴史学のほか、社会科学の文献も収集した。このほか、京都大学人文科学研究所の共同研究「フーコー研究：人文科学の再批判と新展開」(2017~2019年度)に参加し、フーコーをキーワードにする人文系研究者との交流を図った。

4. 研究成果

(1) 2016年度 1970年代のフーコー思想における戦争概念の位置づけにかんする自身の研究を展開させ「真理戦」という視角を提起した。フーコーが統治性論を本格化させる1970年代後半になると、それまで権力論が大きく依拠してきた戦争のモデルは、敵味方という二項対立的な図式に限界により放棄され、リベラルな統治のモデルへと移行したとの通説がある。これに対して本研究では、戦争概念の「持続」という研究代表者のこれまでの議論に修正を加え、戦争という観点が、真理概念を通じて統治概念に「持ち込まれている」と論じた。フーコーが主体間の真理をめぐる争いを「真理ゲーム」と呼んだことはよく知られているところだが、この点を踏まえたくて、こうした戦争、真理、統治という3つの概念のかかわりを「真理戦」という表現で捉えることを試みた。そして1970年代前半の内戦論における、フーコーの非公式マルクス主義や階級闘争論とのかかわりと、当時から1980年代まで続く真理体制論とを接続した。同時に、個人や小集団のレベルで行われるミクロな闘争と国家のレベルで行われるマクロな統治とを架橋する真理概念のなかに存在する敵対性の契機を浮き彫りにした。フーコーは真理概念を権力や統治、主体化といったテーマのなかで考えているが、そのことを本人にならって「ゲーム」と呼ぶ

ことは、権力論を主体間の戦略的な争いとも捉えていたフーコー権力論の基本的なスタンスを相対化してしまうことにもなりかねない。この難点を意識しつつ、1970年代前半のコレージュ・ド・フランス講義録や最近の2次文献での議論を踏まえ、権力論と統治論とのダイナミックな関係に光を当てた。

(2) 2017年度 夏にソウルを訪問し、フーコーをはじめとするフランス社会哲学の韓国での今日的な受容と当地での社会運動の動きについて大学内外の研究者・知識人や活動家から話を聞くことで、フーコーにおける「戦争」概念から社会運動にアプローチするための切り口を探るヒントを得た。訪問中には研究成果について口頭発表も行ったほか、拙著『フーコーの闘争』(2013年刊)の韓国語版出版作業を進めている出版社をはじめ、出版関係者との意見交換も行った。韓国における現代思想と社会運動との関係、また研究の東アジアでの将来的展開と社会的還元のあるあり方について豊かな示唆を得ることができた。戦争という統治の観点から、フーコーの新自由主義論をめぐる最近の動向を政治思想家ウェンディ・ブラウンの近著への論評というかたちでまとめた。ブラウンは現代米国の新自由主義についての言説分析を行う一方で、アリストテレスや疎外論的マルクス主義を理論的背景として、民主政治の目標に善を掲げ、自由な生の尊重を訴える。ブラウンのような立場からすると、福祉国家による生の管理に一貫して異議を唱えたフーコーの所論は、国家の社会的役割の縮減を推進する新自由主義に悼さず側面があると映る。しかしブラウンの議論には、私たちがすでに高度に人的資本化されていることへの批判をリベラルなヒューマニズムの観点から行う点で限界を抱えている。この争点について、統治論からの批判的応答が必要なことは指摘できたが、詳しく論じることができなかった。2月には『肉の告白』刊行直前にパリで行われたシンポジウムを聴講し、同書をめぐる問題系について情報収集を行ったほか、国立図書館で関連資料についての調査を行った。

(3) 2018年度 1970年代フーコー統治論と戦争概念とのかわりについての考察を深めるとともに、フーコーのキリスト教への関心と権力論・統治論との関連を検討した。1970年代半ばまでのフーコーは、規律権力、ひいては真理・真実を通じた他者の振る舞いの管理統制としての「他者の統治論」の祖型となったのは、中世キリスト教の修道院や改革運動であり、その後の告解実践の「世俗化」現象であると説いていた。他方で、1970年代後半の統治論では、「政治的霊性」という表現を用いて、キリスト教の霊的・宗教的实践と、世俗社会における権力関係の実践との接合である「司牧権力」による「他者の統治」に相対する、被治者みずから行う「別の導き」、すなわち主体的でオルタナティブな統治としての「自己の統治」を導出した。フーコーは世俗的なものと宗教的なものが交錯するところで権力概念を捉えることで、統治論における「救い」の問題を析出させていると言ってよい。まず、ここまでの議論を整理し、提示した。他方で、戦争概念と統治概念のかわりについては、フーコーが戦争概念を放棄し、関係論的な権力論への比重を高めたとされる『知への意志』刊行以降においても、戦略と戦術といった戦争にかかわる語彙をそのまま保持していることに注目した。そして1970年代前半のフランスという、ポスト68年5月における議会外左翼の運動が最高潮に達していた時期のなかで、フーコーが戦争概念を権力関係の解釈の中心に据えようとした1972-73年度の『懲罰社会』講義を読解することで、この概念の現代性について検証を行った。また思想的にみて、当時の知的状況を強く反映している、ランシエールの著書『哲学者とその貧者たち』の翻訳・刊行に参加した。

(4) 2019年度 ポスト68年5月の政治状況と強い関係にある、1970年代前半のフーコー思想を取り上げ、政治的主体をめぐる問いの展開を「人民(民衆)」と「戦争」というキーワードを手がかりに考察し、前半の「戦争」概念を軸とした権力論と、後半に現れる統治論との接地面を探った。そして人民・民衆という反乱の主体が、契約の主体としての個人の集合体である人口へと作りかえられていくプロセスについてのフーコーの議論を再評価することが、権力論から統治論への滑らかな移行という通説的なフーコー理解を変える契機となることを示した。6月には、サンドロ・メッザードラ氏を招聘しての国際研究集会を開催し、現代における新自由主義批判とフーコー思想との接点を探った。氏は、ポスト68年5月のフランス社会哲学の現代的な受容と発展を考える上で重要な、1970年代以降のイタリアの批判的社会哲学をアップデートし、国際的な活躍もめざましい人物である。氏はフーコーのマルクス読解に焦点をあて、イタリア・アウトノミア派によるフーコー受容史とも重ね合わせるとともに、労働力が生産力へと変形する過程における身体的重要性をフーコーが指摘した点を高く評価した。そしてフーコーのこのようなマルクスの読みが、今日の移民問題や労働問題を批判的に考えるうえできわめて示唆的であることを指摘している。メッザードラ氏の理論的な介入により、戦争と統治、ポスト68年5月をキーワードとした本研究は、1970年代前半のフーコーの一連の仕事を、統治性研究への通過点ではなく、独自の意義をもつものとして取り出しうるものとして捉えたいうえで、そのような創造的な読解によって、現実の社会状況に対する批判的なアプローチが可能になるという結論を得ることができた。研究集会の開催を通じて、本研究全体を総括し、今後の展望を得ることができただけでなく、関連する研究者とのネットワーク構築を行うことができた。このほか、国際研究集会での議論を引き受けるかたちで、今日における「採取主義(extractivism)」の問題を気候変動や労働にかんする問題との関係で考察した。このほか、『肉の告白』に示された1980年代フーコーの主観性をめぐる考察についての研究を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 箱田徹	4. 巻 77(2)
2. 論文標題 ミシェル・フーコーとキリスト教 「救い」をめぐるたたかい	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 箱田徹	4. 巻 79
2. 論文標題 人的資本批判としての新自由主義論：ウェンディ・ブラウン『いかにして民主主義は失われていくのか』を読む	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 箱田徹	4. 巻 1145
2. 論文標題 人民の回帰?：フーコー戦争論のポテンシャルティ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 166-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 箱田徹	4. 巻 48(5)
2. 論文標題 採取：現代思想と気候正義の蝶番	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 198-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 箱田徹	4. 巻 87
2. 論文標題 変わる欧州の社会運動：左翼ポピュリズムと気候変動問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊ピープルズプラン	6. 最初と最後の頁 84-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 箱田徹
2. 発表標題 リベラルでない自由へ：フーコーとアドルノによる「啓蒙とは何か」
3. 学会等名 カルチュラル・タイフーン2018
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 ジャック・ランシエール著 / 松葉祥一・上尾真道・澤田哲生・箱田徹訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 航思社	5. 総ページ数 416
3. 書名 哲学者とその貧者たち	

1. 著者名 市田良彦・王寺賢太編 (分担執筆 pp. 296-314)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 411
3. 書名 ポスト68年 と私たち：「現代思想と政治」の現在	

1. 著者名 小泉良之・立木康介編（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 未定
3. 書名 フーコー研究（仮）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>箱田徹 http://www.arsvi.com/w/ht16.htm Foucault, Michel ミシェル・フーコー http://www.arsvi.com/w/fm05.htm</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考